戦国武将、活躍の背景とその魅力。

武将の居城の変遷と、代表とされる家紋。

1467年の応仁の乱以降、将軍と室町幕府の権威は畿内の一地方政権程度に失墜。これにより、下剋上の時代が到来し、激動の戦国時代が始まる（時代区分は諸説あり）。そして戦乱の世の終焉を、徳川家康が江戸幕府を開き、大坂の陣終了後とさせていただいた。

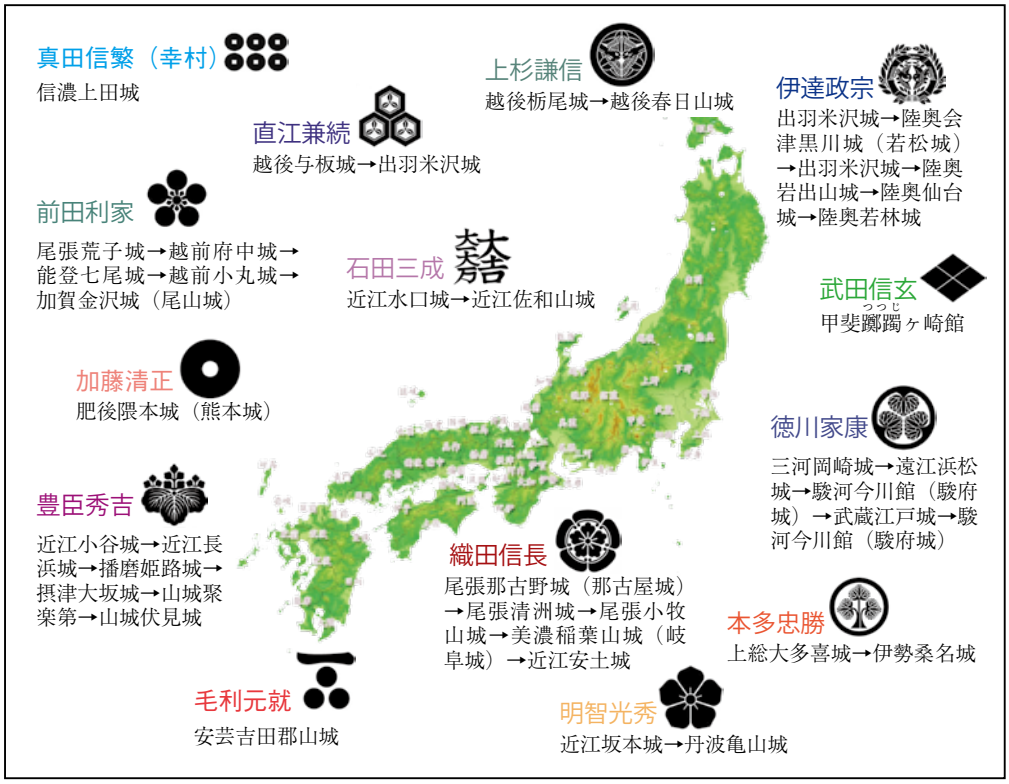
ここでは、五月物でみかける戦国時代の武将など、最近人気の武将14名を中心に掲載。

そのほか、甲冑の変化、変わり兜について紹介する。

登場する武将（五十音順）

明智光秀・石田三成・上杉謙信・織田信長・加藤清正・真田信繁（幸村）・武田信玄・伊達政宗・徳川家康・豊臣秀吉・直江兼続・本多忠勝・前田利家・毛利元就

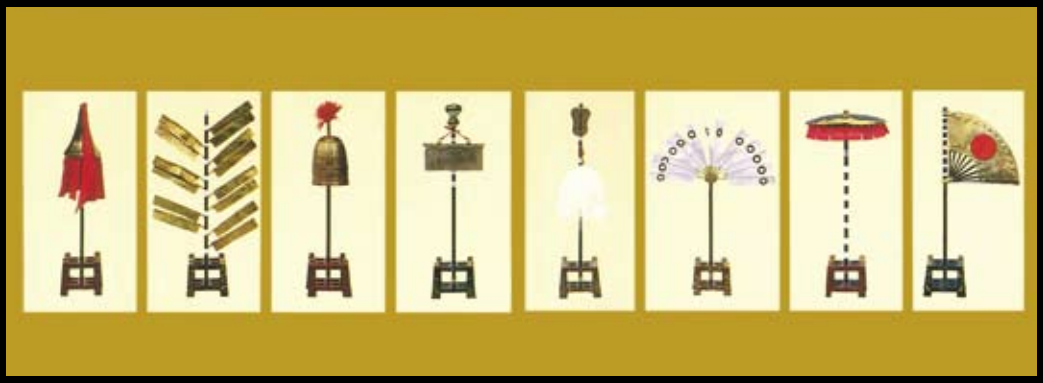
協力：徳川美術館・加藤一冑氏・加藤峻厳氏・㈱忠保・㈱鈴甲子・林直輝氏（吉徳資料室）



武者絵幟

端午の節句でおなじみの武者絵幟。戦国時代の旗指物をルーツとして、江戸時代中期頃から、大型で豪華な節句幟が立てられるようになった。右から、「神功皇后・武内（宿禰）」、「宇治川の先陣争い」、ベランダ用「川中島の合戦」、庭園用「川中島の合戦」、「太閤・加藤」、「家康と四天王」（写真提供：ワタナベ鯉のぼり㈱）

戦乱を生きた男たち。



織田信長

「天下布武」のスローガンのもと、全国の半ば近くを平定。

勇猛果敢な性質に加え、長槍隊や鉄砲の導入による画期的な戦法を採用する積極性と、商業の興隆による資力の増大を図るといった経営能力にも秀でていた。

徳川家康

剣術、砲術、弓術、馬術、水術等の武術について一流の域に達していたといわれる。

「歯朶具足」は家康が長久手・関ヶ原・大坂の陣に着用し、常に勝利を収めた。歴代将軍はこれを幸運の具足として、毎年一月十一日の具足開きに必ず床飾りとした。

また葵紋は、絶対的な権威があり、他家の使用を一切禁じられていた。

豊臣秀吉

「天下一の出世頭」と呼ばれた武将。優れた経済感覚を、合戦や町づくりに発揮。金の茶室に代表されるように、とにかく黄金を好み、旗などにも金色を用いた。

馬藺の兜は、ねじあやめの葉を、日輪の光に見立てて配した後立が特徴的。

伊達政宗

いわずと知れた「奥州の覇者」。もとは兵糧開発のために行っていた料理が、晩年の趣味となり、客人は自らの料理でもてなした。また、国際的な視野を持ち、海外に使者を派遣した。

政宗所用の弦月形前立を施した仙台市博物館所蔵「鉄黒漆塗五枚胴具足」は、重要文化財に指定されている。

上杉謙信

私欲よりも義を重んじた義将。謀りごとに無縁で、戦闘だけで地位を築いた。神仏への信仰が深く、飯綱権現・毘の文字など、軍神を表した前立の兜などがある。

「四十九年一睡夢　一期栄華一盃酒」の辞世の句は有名。

直江兼続

智勇兼備にして、信義に厚い。愛の前立は、下に仏教的な瑞雲の意匠もあるので愛宕将軍地蔵か、愛染明王の一字をとったものだといわれている。また、二重しころはめずらしい。

真田信綱（幸村）

大坂の陣での大活躍が有名。武具を一色に統一した「赤備え」の部隊は精強で、徳川の本陣への3度の突入を試み、大混乱に陥れた。敵方の島津忠恒が、国許へ宛てた書簡に、この活躍をして「真田日本一の兵、古よりの物語にもこれなき由」と称えた。

亡くなった人を葬る時、棺に入れる六文の冥銭（三途の川の渡し賃）を旗印にすることで「不惜身命」（仏法のために身命を捧げて惜しまないこと）を意味するといわれている。

武田信玄

「甲斐の虎」の異名を持ち、武田軍団は戦国屈指といわれた。

分国法を定めたり、新田開発や金貨の製造、治水、交通整備の実施などで領国を発展させた政治家

としても有名。
ゆかりの深い高野山成慶院には、武田菱を配した変わり頭形（ずなり）兜がある。

本多忠勝

徳川四天王、三傑と称えられた。生涯57回の戦いにおいて、無傷だったといわれる最強の武将。「東国一の勇士」と秀吉から評価された。
長篠合戦図屏風（徳川美術館所蔵 13ページ参照）には、忠勝が鹿角の脇立の兜を着用して戦っている姿が描かれている。

前田利家

若い頃は派手な格好を好んだので「かぶきもの」といわれた。信長の親衛部隊である「赤母衣（ほろ）衆」に名を連ねて頭角を表した。槍の名手でもあった。
加賀藩百二十万石の礎を築き、人望があり、信頼できる友人もいた。

加藤清正

武功に優れ、とくに賤ヶ岳（しずがだけ）の戦いでは大活躍をし「賤ヶ岳の七本槍」の一人として、後世に称えられた。
また、熊本城築城を始め、新田開発や治水工事など、民政にも実績を上げている。

石田三成

最期まで豊臣家への忠誠を貫いた。
「大一大万大吉」は「一人が万人のために万人が一人のために尽くせば天下大吉となる」との意味で、勝利の念願、縁起の良さから家紋として用いられるようになった。（石田氏のほかにも備後の山内氏が用いている）

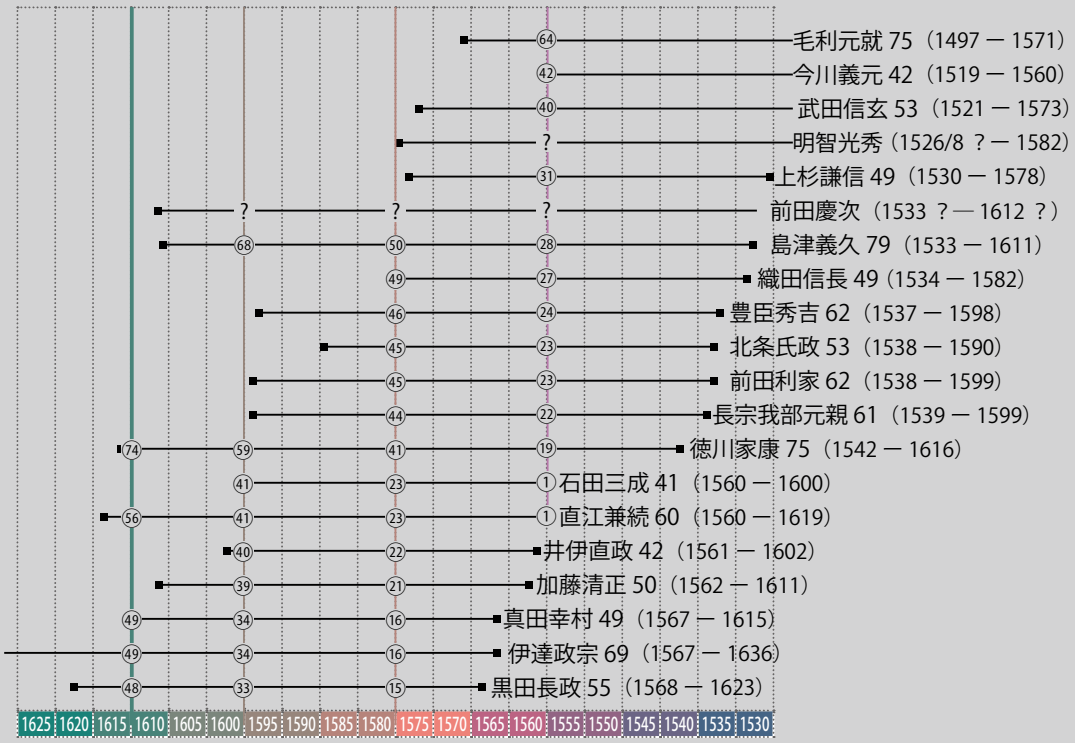
明智光秀

几帳面で、茶の湯、和歌なども嗜（たしな）んだ文化人。
美濃の守護土岐氏の流れを汲むといわれ、家紋も土岐氏ゆかりの「桔梗」を用いている。

毛利元就

一介の国人領主からのし上がり、中国地方を制覇した戦国きっての知将。謀略を得意とし、陶（すえ）氏や尼子氏などの強敵を、内部から攪乱して陥落させた。
死の床では「毛利家は天下を目指さず、家の繁栄と存続に専念せよ」との言葉を残している。

武将年齢対象表。



○は、当時の年齢。名前のあとの数字は、没年齢（ともに数え年）。

武士としての心根を表す。

長烏帽子形兜　加藤清正所用　桃山時代

（徳川美術館所蔵）

突盔（ぱい）形の鉢の上に、高く伸びた長烏帽子を象り、黒漆で一閑張風に固め、上に銀粉を塗り、両側面中央に朱塗の日の丸を配した兜。しころは黒漆塗鉄板物五段の日根野形（肩の形に沿って繰り上がったしころ）を、黒糸で素懸威（すがけ）にしている。烏帽子は、加藤清正直筆の「南無妙法蓮華経」と書いた数百枚の紙を張り合わせて作ったという一説も。「清正記」に、彼が慶長（1598）年、蔚山（うるさん）の戦で「例之銀之長帽子の甲（かぶと）を着」と、本品を着用した記述がある。

熊毛植黒糸威具足
徳川家康所用　桃山―江戸時代

（徳川美術館所蔵）

兜は頭形鉢の上に熊毛を植え、桐製黒漆の大きな水牛の角を象った脇立が高く突き出している。「関東の猛牛」という異名の由来は、この兜によるといわれている。胴・小手・草摺など総体に熊の毛を植え付け、黒糸で威した具足。面頬は朱塗の目の下頬で、黒漆塗の板物三段の垂を黒糸で威している。

花色日の丸威具足
徳川家康所用
桃山時代

（徳川美術館所蔵）

鉄片を黒漆で塗り固めた小札を花色の糸で威しながら、胴の中央と、左右の大袖に、紅糸で大きく日の丸を威している。更に各板所には黒漆塗に菊・桐・輪宝などの紋が金蒔絵で施されている。かつては秀吉所用とされていたが、調査の結果、家康着用のものであったと判明。

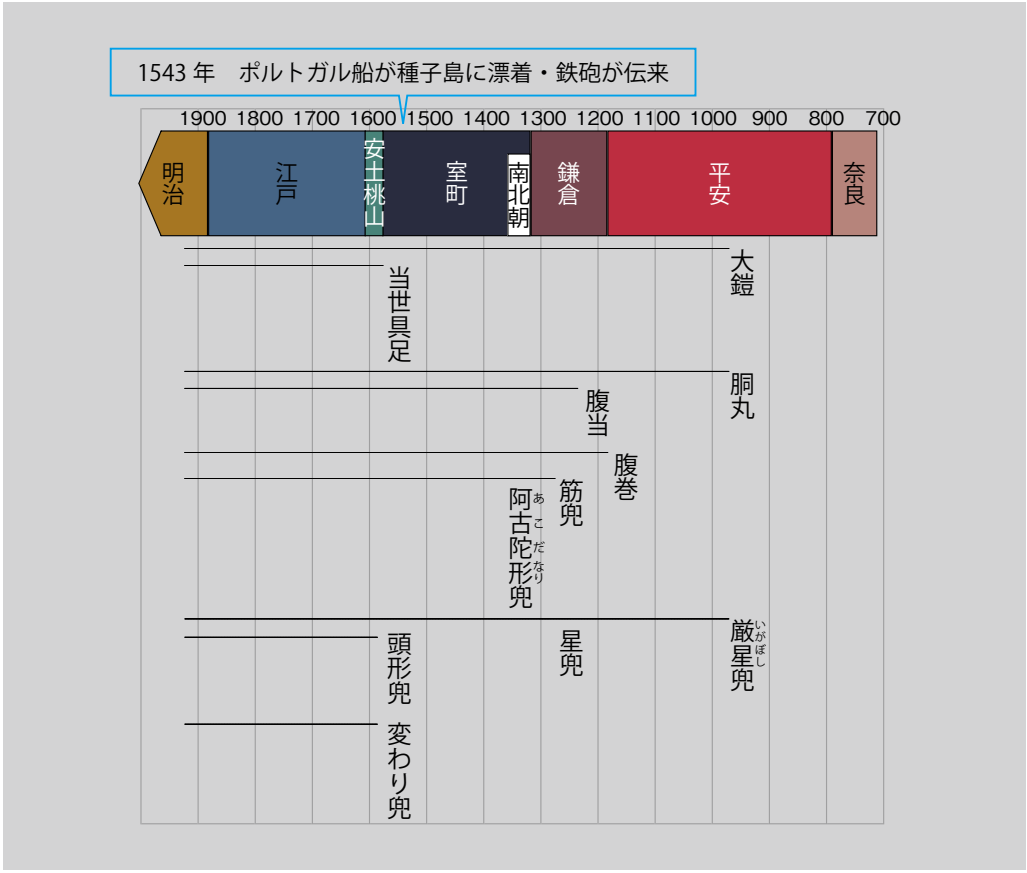
銀溜白糸威具足
徳川義直所用
江戸時代

（徳川美術館所蔵）

銀色に包まれた中に、朱と萌黄の色が鮮やかに映える華麗な具足。家康の九男義直が着用したもの。

甲冑の流れ。

平安時代以前の挂甲（けいこう）等は、除く。



甲冑は防具であるため、当然だが、戦闘の様式、武具の変化に対応して変わってきた。また、貿易の影響で、室町時代末期からは、素材も変化していった。

戦国時代当初は、槍・弓矢などが攻撃武器の主力であったが、鉄砲の伝来により、鉄砲が主力武器となることで、従来の良い点を残しつつも大改良が行われた。

そこで登場したのが、「当世具足」で、「当世」は現代（風）を意味し、調度や道具類の〝具（そなえ）〟が足りる〟ことから、防御機能が完備した現代風の鎧という意味で名付けられた。

安土・桃山時代の当世具足は、デザインが斬新であり、実戦本位であった。また、自身の働きを主君にアピールするために、戦場で衆目を集めることが重要であり、目立つ大胆な色目や、奇抜なデザインが用いられた。生きるか死ぬかの場で、自己を際立たせるための主張の道具でもあった。

江戸時代の甲冑は中期頃になると、実戦用の甲冑とはやや距離があり、技巧に凝る飾りもの、美術品のようなものも多い。

変わり兜は、室町時代末期頃から始まり、安土・桃山時代に全盛期を迎える。

鉢自体が変わった形になるように鉄板を打ち出して作る方法と、シンプルな鉢の上に革や和紙をさまざまな形に張懸ける方法の２つで作られる。

さまざまな兜の主な例をあげると、

突盔（とっぱい）形兜…長宗我部元親所用「鉄地十二間突盔形兜（土佐神社所蔵）

桃形兜…黒田長政所用「黒漆塗桃形大水牛脇立兜（福岡市博物館所蔵）

南蛮形兜…徳川家康所用「南蛮形兜 南蛮胴具足付」（日光東照宮宝物館所蔵）

頭形（ずなり）兜…越中頭形兜・松平定基所用「五輪塔六字名号頭立兜」（京都国立博物館所蔵）

椎形兜…徳川家光所用「黒漆塗椎形兜」（久能山東照宮博物館所蔵）

植毛兜…右ページ「熊毛植黒糸威具足」（徳川美術館所蔵）

張懸兜…右ページ「長烏帽子形兜」（徳川美術館所蔵）

などがある。